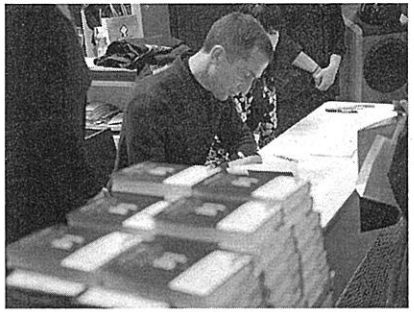
『音楽の友』（Ongaku no tomo）2016 June

Scramble Shot

Concert テディ・パパヴラミ&萩原麻未「特別チャリティーリサイタル2016」

無償で集団による音楽教育を行う「エル・システマ」。日本では2012年3月に福島で「エル・システマジャパン」がスタートした。その主催による「特別チャリティーリサイタル」が4月7日にHakuju Hallで開かれた。出演はヴァイオリンの鬼才テディ・パパヴラミと、ジュネーヴ・コンクールで日本人として初めて優勝したピアノの萩原麻未。

まずエル・システマジャパン代表理事の菊川穣が「被災地のことにも思いを馳せていただきたい」と挨拶し、パパヴラミのJ.S.バッハ「シャコンヌ」で始まった。響きの豊かなHakiju Hallの特性を生かし、軽い弓による弱音を生かした演奏。続くドビュッシーのソナタは、メリハリを付けながら洗練された雰囲気。萩原のピアノは、音量を押さえつつも表情豊かだった。ラヴェル《ツィガーヌ》ではパパヴラミが、LVMHモエヘネシー・ルイヴィトンから貸与されたストラディヴァリウス「Reynier」を気持ちよく鳴らしていた。休憩後のフォーレ「ソナタ第1番」では、二人も伸びやかな「歌」を聴かせてくれた。最後は、人気のサラサーテ《ツィゴイネルワイゼン》。妙技を披露しつつ、芸術性の高いコンサート・ピースとしてのアプローチが印象的だった。アンコールはアルメニア舞曲とタイス《瞑想曲》。雑味のほとんどない美しい音色が心に残った。会場では独裁政権下のアルバニアからフランスへ亡命したパパヴラミの波乱の半生をつづった自伝『ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ』（藤原書店）も販売。彼は優しいほほ笑みでサインに応じていた。（堀江昭朗）



テディ・パパヴラミ（vn）。終演後のサイン会の様子。テディ・パパヴラミ著『ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ』（山内由紀子訳、藤原書店）が発売中（4月7日・Hakuju Hall）

News & Information

BOOK-END

過酷な境遇をヴァイオリン一つで切り開いた少年の物語

「ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ」

テディ・パパヴラミ 著　山内由紀子 訳
（藤原書店　本体4600円+税）

著者は1971年アルバニア生まれの鬼才ヴァイオリニスト。幼少より「アルバニアのモーツァルト」と賞賛され、フランス政府から奨学金を受けて11歳で渡仏。パリ国立高等音楽院でピエール・アモイヤルに師事し、93年パブロ・サラサーテ国際コンクール優勝。パッパーノ、ロト他著名指揮者やチッコリーニ、ピリス、アルゲリッチ等著名ピアニストと共演し、「シューマン・ピアノ四重奏団」のメンバーとして9年間活動、2008年からはジュネーヴ高等音楽院教授を務めている。本書は、ヨーロッパ最後の"鎖国"と言われた共産主義独裁政権下のアルバニアに生まれ、15歳で亡命を余儀なくされた著者の、波乱万丈の半生を綴った自叙伝。各章末に載ったQRコードを読み取ると、ストーリーに合わせて選ばれた演奏が聴ける新しい試みも。